



福島県 小学校長会 会報

- 巻頭言…………… 1
- 教育ニュース
『学力向上』と『働き方改革』
のさらなる推進に向けて… 2
- 特集「ふるさとを愛し ともに
未来を切り拓くたくましい
子どもの育成」…………… 3～6
- 支会だより…………… 7～10
- ふくしま人 この道に生きる… 11
- 表彰・各部だより…………… 12



東日本大震災の記憶から

福島県小学校長会副会長 高田 英世

東日本大震災、原発事故から13年が経ちます。被災地の学校に勤務し続けてきた者として、これらに対する風化を大変危惧しています。3月11日を前に当時の様子を振り返ってみます。

3月11日（金）東日本大震災発生

教頭として勤務していた飯館村立白石小学校は、校名のごとく地盤が硬く長時間の揺れはあったが、図書室の本がたくさん床に落ちた程度で、建物などに特に大きな被害はなかった。幸い、児童は全員下校しており無事であった。

退勤後、家族の安否確認のため単身赴任先から自宅のある浪江町に向かうと、道路の陥没や建物の倒壊が多く見られた。自宅や近くの避難所を確認したが、携帯も不通で家族は見当たらなかった。結局、翌日も勤務があるため、教頭住宅へとんぼ返りした。停電で真っ暗な中、石油ストーブだけで暖をとって過ごした。

3月12日（土）福島第一原発1号機 水素爆発
出勤、会議、家庭訪問

3月13日（日）会議、雪かき
23日まで臨時休校することが決まった。

3月14日（月）福島第一原発3号機 水素爆発
放射線量 0.09 μSv

南相馬市からたくさんの方が飯館村へ避難してきたため、学校体育館に避難所を開設した。

3月15日（火）福島第一原発4号機 水素爆発
最大放射線量 44.7 μSv

避難所管理のため夜は職員室に詰め、校長と交代で保健室に泊まることになった。

3月17日（木）放射線量 30 μSv 以上

モニタリングポストが故障したため代替線量計で測定したが、その測定上限を超えた。

3月18日（金）

避難所閉鎖が決まった。地教委から管理職も

飯館村を離れて良いとの指示があり、家族が避難する会津若松市に27日まで待機した。

3月28日（月）白石小で勤務開始

4月7日（木）

川俣中で開校するため、校舎の下見をした。

4月13日（水）～18日（月）

村のトラックで飯館村の小学校から川俣中へ机、椅子をはじめ教材や備品の搬入をした。

4月20日（水）

飯館村の飯館中で小中合同入学式を行った。

4月21日（木）

川俣中で草野、飯樋、白石小学校が合同で授業を再開した。年度末には同じ川俣町内にプレハブの仮設校舎ができあがり、卒業式後には、また引越し、年度初めに間に合わせた。

以上のことは、震災直後の主な動きです。短期間での移転、そして授業再開のため、慌ただしい毎日でしたが、飯館村3校の小学校教職員が連携、協力し、学校再開へ奔走しました。

震災後は、放射線という目に見えない、そして病気になる閾(しきい)値もはっきりしない敵との戦いがありました。そんな中低線量被曝は避けられませんが、正しく恐れ、無駄な被曝をしないように気をつけ教育活動を進めてきました。

考えてみると、新型コロナウイルスも放射線と同じ目に見えない敵でした。今後も、予想もしない新たな問題が起こってくると思いますが、校長会のつながりを生かし、目の前の子どもたちのため、よりよい判断をしていくことが大切です。そして、与えられた環境の中で最大限の努力をし、難局を乗り切っていかなければなりません。

「大丈夫、心配するな、何とかなる」一休宗純

『学力向上』と『働き方改革』のさらなる推進に向けて

福島県教育庁義務教育課長 川井 孝寿

日頃より当委員会の教育施策に御理解と御協力をいただき誠にありがとうございます。『学力向上』をはじめ、『不登校児童』や『ICTの活用』など課題山積の昨今でございますが、次年度に向けて、中でも特に喫緊の二つの課題について、思い切ったお願い（提案）をさせていただきます。

○『ふくしま学力調査』の効果的な活用

今年度で5回目となった本調査は、最初の調査対象の小学校4年生の学力の伸びについて（コロナによる中断はあったものの）5年間を通して把握できるという節目を迎えました。ここで改めて本調査の『目的』を確認させていただきますが、報告書の概要版にもあるとおり、本調査は『児童一人一人の学力の伸びの把握』と『教育施策等の検証、及びその改善』を目的としています。

そのため、調査結果の分析が一番の鍵となってきます。その際、担任や担当者などに任せるのではなく、様々な立場で組織的に分析することが大きな効果につながります。

担任は、児童一人一人の『学力のレベル』と『学力の伸び』を確認し、学習改善に生かすことができますようになります。また学校は、『学年・学級の学力の伸び』や『児童の実態』を捉えることで、授業改善及び学校経営の工夫に生かすことができます。さらに教育委員会は、『学力を大きく伸ばした学校』を確認し、効果的な取組を他校にも広げるとともに、新たな教育施策への手がかりを得ることが可能になります。一人一人の複数年にわたる詳細かつ膨大な情報の分析は、一見、困難を極めるように感じられますが、当委員会で開発した『分析ツール』を活用することで比較的分かりやすく整理できるようになっています。

従いまして、本調査は、過去問での練習や出題傾向の分析などのいわゆる『テスト対策』ではな

く、結果の分析にこそ注力いただき、さらなる効果的活用をお願いいたします。

○『教育活動』『教職員の働き方』の見直し

教職員の勤務時間外労働や多忙化が問題視され、全国的に『教員のなり手不足』が大きな課題となっています。もちろん本県も例外ではありません。教職員は、子どもたちにとって一番身近な職業人であり、『魅力的』で『あこがれ』を持たれるような教職員の姿こそが、志願者減少の歯止めとなり、ひいては学力向上にも繋がると考えます。

前例踏襲では持続不可能な時代に突入した今こそ、『働き方（意識）改革』が必要です。

例えば、練習や準備に時間がかかる運動会や学習発表会などの大きな行事を、体育や音楽、総合的な学習の時間の授業参観等に置き換えてみるというのはいかがでしょうか。また、毎学期末の通知票の配付は、学力向上に必要不可欠ですか。さらに、学校の解錠・施錠を管理職に任せきりにせず、職員間での輪番制というのは不可能ですか。いわゆるフレックスタイムのような柔軟な勤務体制や児童の登校時刻の変更なども有効かもしれません。

これまでの当たり前をゼロベースで見直してみると、他にもたくさん工夫の余地があるかと思われます。もちろん、教職員はもとより、地域や保護者へ丁寧に説明し、御理解と御協力をいただくことが前提となりますが…。

ぜひ、校長会で一丸となり、お取り組みいただきますようお願いいたします。

福島

新たな教育活動の推進と 教員の資質向上 ～基礎的・汎用的読解力を基盤とした 授業及び実践を通して～

福島市立野田小学校 小川 尚子

1 はじめに

本校は、「福島市教育振興基本計画」の施策「確かな学力の育成」の取組方針である「よめる、つかえる力の育成」に向け、令和3年度より「基礎的・汎用的読解力」の向上に資する研究に継続して取り組んでいる。子どもたちが、文章の内容及び図表やグラフ等の情報を正確に読み解くことができるよう、国語科に限らず全ての教科において、語彙力の強化及び文の構成に関する学習、資料を活用した学習の充実に向けた授業を行っている。

以下に、実践事例と成果の一端を紹介する。

2 未来を切り拓くたくましい子どもの育成のために

(1) 基礎的・汎用的読解力の向上に向けた取組

本校は、児童数695名、教職員数53名、学級数27の大規模校である。現職教育では、一人一授業を基本とし、昨年度は主要4教科、今年度は国語と算数に焦点を当て、外部講師を招聘して授業研究会を行っている。

研究推進に当たっては、「子どもがつかず言葉は何か」「書かれていることと図表をつなげるためにはどのような手立てが必要か」など、子どもたちが問題文や情報を正確に読み取って思考したり、理由や根拠を明らかにして表現したりする授業を目指し、研修を積み重ねている。

【授業での共通実践事項】

- ①リーディングスキルの6つの視点を授業に生かす
- ②全教科での音読、聴写、辞書引き
- ③実態把握からの追指導を大切にする（チャレンジテストや確かめテストで課題を把握し、習得できていないところは追指導を行う）
- ④振り返りの習慣をつける（授業の終末だけでなく、自主学習の振り返りも大切にする）
- ⑤ふくしま活用力育成シートを活用する

(2) 野田中学校との連携

野田小学校の学区は、一小・一中学校区であり、野田中学校とは容易に連携が図れることか

ら、授業における「聴写」や小・中学校の一週間の読書時間の合計5000時間を目標とする取組など、基礎的・汎用的読解力の向上につながる共通実践を行っている。小学校での学びが、途切れることなく中学校へと積み上がり、子どもたちの力となることが大きな目標である。

(3) 子どもの姿

今年度、3年ぶりに実施した学習発表会では、6年生が、市役所から取り寄せた資料や新聞・インターネットの情報から捉えた34の課題について考察し、課題解決に向けた自分たちの取組について保護者や地域の方々に説得力をもって発信することができた。「福島県の学力の課題」を追究したグループは、全国学力・学習状況調査の結果と自分たちの学習への取組や意欲等について考察し、全国ランキングトップ10に入るための方策や未来を創るための学びの必要性について、自分に引き寄せながら発表することができた。

また、日々の授業では、教科書の文を正しく読むために、分からない語句を辞書で調べたり、言葉にこだわって読みを深めたりする子どもの姿が見られるようになってきている。



分からない言葉を辞書で調べる

3 むすびに

11月の月案に本校2年目の再任用教諭が記載した文章を紹介する。

「職員室にいる先生方の声を聞きながら仕事をするとなぜ心地よい。先生方が、子どもの学力や生徒指導上の問題、行事の持ち方などについて熱心に話し合っている姿は、大変好ましいものだ。本当によく打合せをして、よりよいものをつくりあげようとしているのがわかる。本校の職員室は、とても居心地がいい。みんな真面目に子どもにとって有益な内容の話や作業をしている。本校の職員室は、いつまでもいたいような気持ちになってしまう。」

教員が、子どもを真ん中にして、さらによりよいものを目指して熱心に語り合う、これは、授業力向上のみならず、教員の資質向上に直結するものであり、理想とする教員の姿であると考えて。今後も、未来を切り拓くたくましい子どもを育てるため、教職員の英知を結集し、学校経営の充実に努めていきたい。

伊達

ふるさとを愛し ともに未来を切り拓くたくましい子どもの育成 ～地域とつながる豊かな体験活動を通して～

桑折町立伊達崎小学校 佐藤 浩哉

1 はじめに

本校は総合的な学習の時間に、地域を理解し、地域を愛し、地域の人から学ぶ機会となる体験活動を数多く設定している。以下にその一部を紹介する。

2 未来を切り拓くたくましい子どもの育成のために ～総合的な学習の時間を活用して～

(1) 3・4年生時の「桃とりんごの学習」

年間70時間の総合的な学習の時間の50時間ほどが桃やりんごに関係する活動となっている。具体的には、地域の生産者の方にお世話になっ



て、花の見学（成長観察）、摘果体験、袋かけ体験、収穫体験などをするとともに、それらの体験の中で、生産者の方からお話を伺ったり、質問したりして、学習を深め、最後にまとめの発表をしている。（左の写真は花の観察と袋かけ体験）

(2) 5年生によるピザの新メニュー（昨年度）

3・4年生の学習をもとに、5年生の総合的な学習の時間70時間のうちの40時間ほどはPizzaSta（ピザ専門レストラン）とのコラボ商品を開発するための時間として、企画・話し合い・試食会・完成披露会（発表・発信）を行った。学校と隣接するPizzaStaと新メニューの開発に携わらせていただき、シェフと何度も打合せを



重ね、試食を経て、最終的に桑折町特産のロイヤルピーチポークや地元野菜を食材とした「元気！ベジタブル伊達崎ピザ」というネーミングで商品化（写真上）することができた。「ピザを通じて桑折町の野菜や

肉のおいしさが伝わって欲しい」という子どもたちの思いが新しい美味しいピザを生み出した（期間限定の販売のため終了）。この活動は小中学生まちづくり大賞（ふくしまジュニアチャレンジ）活動部門で銀賞にも輝き、思い出に残る体験になるとともに、その後の活動の自信となった。

(3) 今年度はスイーツ新メニュー！

今年度も総合的な学習の時間の40時間ほどをPizzaStaとの活動時間とした。

当初、3班に分かれ、それぞれクレープ、パフェ、タルトの新メニューを考え、桑折町の特産品である桃や半田山をモチーフにしたデザインで、季節を意識した食材を使うなど、工



夫を凝らした案がPizzaSta店内で発表された（写真左）。話し合いの結果、それら全てを取り入れたパフェとなり、テレビや新聞でも報道された「ハートレイクフルーツパフェ」（写真左）というネーミングで商品化され販売されている。



3 むすびに

3・4年生は桃・りんごの学習をする中で、誇りをもって精力的に仕事をする地区の方々を身近で素敵なお大人として再認識できた。また、桑折町の本地区が王林発祥の地であり、保存会の方から王林の歴史について説明を聞き、ふるさとに誇りを感じながら収穫体験もした。

さらに、5年生で、その王林や桃をはじめとした桑折町の特産品を使ったピザやパフェを商品化できたことに対する達成感と地元へ貢献できた喜びを味わい、桑折町、伊達崎地区をふるさととして強く意識し、さらに誇りをもって愛することができていると感じる。

本校近くに来られた際は、隣のPizzaStaで、是非、美味しいパフェを味わい、子どもたちのふるさとへの愛と誇りを感じていただきたい。

安達

ふるさとを愛する
ハピネスクリエーターの
育成を目指して

本宮市立本宮まゆみ小学校 鈴木 規男

1 はじめに

本校は、美しい安達太良山を仰ぎ見る本宮市の中心部に位置している。創立25年目を迎え、教育目標は「楽しいこと考えよう！」である。この教育目標は、令和3年度に改められた。全児童、保護者がこの教育目標を覚えており、この目標のもとで「しあわせを創るまゆみっ子（ハピネスクリエーター）の育成」を目指している。

今年度は、子どもたち一人一人がふるさと本宮の「ひと・もの・こと」とつながり合いながら学ぶことを通して、本宮市でさらに本校で学ぶしあわせを実感するとともに、主体的で深い学びに広げていきたいと考え教育活動を実践している。以下にその取組の一部を紹介する。

2 未来を切り拓くたくましい子どもの育成のために

「ふるさと本宮に学ぶ」を教育活動の軸とし、全ての教育活動で「本宮のひと・もの・こと」とのつながりをつむぎ直し、子どもを中心に保護者と地域が関わり合いながら探究的な学びを展開する。

(1) 出会い・学び・しあわせを創造する

本校では「わたしたちのふるさと本宮」を大きな柱とした総合・生活科の学習の推進を図ってきた。それぞれの学年で「地域・環境・福祉・本宮の未来」をテーマに学習を進めている。

こうした学びの集大成として6年生は学習発表会で「現在の本宮の姿」から「未来の本宮の姿」を考え、ジャンル毎に発表を行った。その内容は「農業・歴史・食文化・防災（水害）・公共施設」と多岐にわたる。それぞれのグループの発表内容は、実際に地域の方を訪問して体験したりインタビューしたりして分かったこと、感じたことを子どもらしい素直な気持ちで表現していた。

さらに、それぞれのチームからは未来に向けての提案があり、防災（水害）チームからは、「本宮は昔から水害の被害にあってきました。でも、それを乗り越えて発展してきました。こ

れからも経験から学んだことを踏まえて、前に進んでいくべきだと思います。」

参観者からは、「大人とは違った視点でよく考察されていました。それぞれの成果をぜひ市長にプレゼンしてほしい。」「6年生の未来、そして本宮市が発展していくのが楽しみになりました！」等の声が多数寄せられ、子どもたちの表情は満足感であふれていた。



「未来の本宮の姿」を発表する児童

(2) 地域の方とのふれあい（コミュニティースクール）

① 学校支援ボランティアとの連携

学校運営協議会の提案から支援ボランティアまゆみっ子会が組織された。PTAとともにあらゆる教育活動で支えていただいている。多くの地域の方々とおふれあうことを通して、子どもたちは感謝とともに本宮で学ぶ幸せを感じている。

② 地域の人材、素材を生かした放射線教育

学校運営協議会の委員の方からの紹介がきっかけとなって、地域の方をゲストティーチャーとしてお招きしている。高い専門性ととも地域性も考慮した指導により、子どもたちの学習意欲が高まった。「地域人材の豊かさに改めて気付かされた。

「良い地域は良い学校を育て、良い学校は良い地域をつくる。」といわれる。学校と地域が共通の課題意識や目標等を共有し、設定した目標の達成に向かって、ともに前進し行動している実感が、学校教育の活性化にもつながっている。

3 むすびに

校名の「まゆみ」の由来は、子どもたちがまゆみの木のようにどんどん伸びて明日に向かって前進するとの願いが込められている。変化の激しい時代を生きる子どもたちが、まゆみのように美しく小さな花を咲かせながら、しなやかに力強く生き抜く力を育んでいきたい。

ふるさとを愛し ともに未来を切り拓く たくましい子どもの育成 ～新たな教育活動の推進と教職員の資質向上～

いわき市立長倉小学校 緑川 敏之

1 はじめに

本校はかつて国内屈指の採掘量を誇った常磐炭田の炭鉱城下町に誕生し、閉山後は閑静な住宅街へと移り変わるとともに少子高齢化が進行し、児童数は181名である。開校以来、地域と連携した教育活動が活発に行われ、郷土愛を育みながら現在と未来に目を向けさせて、自らの人生を力強く切り拓いていくことができるように一丸となって取り組んでいる。

2 未来を切り拓くたくましい子どもの育成のために

(1) 「育てる4つの力」とループリックの作成

年度当初、教育目標の具現化を目指して、本校の児童にどんな力を育む必要があるかを議論し、「自分の考えを見つける力」「自分を表現する力」「仲間と高め合う力」「チャレンジし続ける力」という「育てる4つの力」を設定した。そして点数で表すことが難しいこれらの力について、具体的な子どもたちの姿をイメージして文章で表現し、到達度毎に表にまとめてループリックを作成した。このループリックは、児童・保護者に周知するとともにホームページにも掲載し、それぞれの立場で児童の成長を促すためのツールとして活用を図っていった。



「4つの力」の中で頑張りたい」力に名札を貼って宣言する児童

(2) 現職教育の推進

① 研究主題の設定

来年度、いわき市小教研生活科・総合的な学習の時間の授業公開に臨む。研究主題の設定では改めて「育てる4つの力」を吟味し、物事を最後までやり抜くことが自信をつかむことや自己肯定感の育成につながるのではないかという思いに至り、研究主題を「自ら課題を見いだし、課題解決に向けて『やり抜く』

ことのできる児童の育成～人々・社会・自然と関わる探究活動を通して～」と設定した。

② 研究の実際

生活科では「町探検」、中学年は「温泉」、高学年は本校のルーツである「炭鉱」を深堀し、未来志向で地域とのかかわりや自己の生き方を探究してきた。その中で、研究主題に基づき、児童の学びをコーディネートするため評価の仕方、思考ツールやICTの効果的な活用等、探究のプロセスを支える手立てを検討し続けてきた。授業研究を積み上げ、教員も児童の学習の中に入り込んで姿が見えなくなってしまうという授業イメージを共有し、研究を深めているところである。

(3) 児童が立ち上げたプロジェクトの後押し

9月に発生した台風13号による大雨災害では代表委員会が中心となって「助け合いの心を行動に表すプロジェクト」を立ち上げ、保護者にも支援を求めながら全校をあげて取り組み、被災した小学校やボランティアさんに応援フラッグや募金を届けた。特に募金活動では、地域の協力の下、児童が実際に街頭に立って呼びかけを行い、多くの善意とともに温かい声をいただくことができた。思いを声に出し、仲間を募り、実行してやり抜いた児童たちは、大きな自信をつかむことができた。加えてこの経験は、災害等が起きたときだけでなく毎日の生活や学習において活用していくことが大事という気付きを得ることができた。

3 むすびに

特に、児童が中心となって取り組んだ地域貢献活動は、子どもたちは地域で守られる存在である一方で、未熟ながらも地域を守り、創る存在であることを保護者・地域に広く伝えることにつながった。こうした学習活動を



現職教育全体会

支え、児童の成長で深い議論ができる本校教員の組織風土は最大の強みである。また、地域との連携においては地元常磐公民館が窓口となっている学校・家庭・地域パートナーシップ推進事業によるところが大きい。引き続き、社会に開かれた教育課程の実現に向けて前進していきたい。

郡山 「校長同士が学び合う校長会」～変革への挑戦～
郡山市立薫小学校 齋藤 和彦

1 はじめに

今年度は、「校長同士が学び合う校長会」～伝統と再構築～を支会運営方針に掲げ、本当に大切なものは何か、私達校長会の真に必要なとしていることは何かをあらためて見直し、支会運営の在り方を模索しながら、挑戦的変革を試みてきた。

2 今年度の取組

支会の取組を通して校長同士が学び合い、自身の資質能力の向上を図ることで、新たな教育活動の充実、創造につなげる一助となることをねらい、小学校長会開催の冒頭に研修会を位置づけてきた。
〈校長同士の学び合い〉(研修会)の位置づけ

- 第2回市小学校長会〔中央研修伝達講習〕
『タイム・マネジメント』～「働きやすさ」と「働きがい」を实践する校長のリーダーシップ～
講師 館脇 一弘 (赤木小学校長)
- 第3回市小学校長会
『子ども達の主体性を育むためのリーダーシップ教育 (リーダー・イン・ミー)』
講師 ウィリアム・マッキンタイヤー 氏
(フランクリン・コヴィー社)



リーダーシップ教育 (学校教育の効果性)

- 第4回市小学校長会
『県立安積中高一貫教育について』
講師 吉田 全 氏
(県教育庁高校改革室管理主事)
- 第5回市小学校長会
『組織マネジメント』～アニマルシンキング～
講師 橋本 一弥 (開成小学校長)

3 むすびに

学校が抱える喫緊の課題、中期・長期的に対応する課題に対して、また、理想とする学校経営の実現に向けて、今年度の取組が、各校の創意工夫と情熱を結び付ける役割を果たすものであってほしい。そして、この取組を通して校長同士が学び合い、自身の資質・能力の向上を図っていくことで、新たな教育活動の充実・創造につながることを願う。

**し東
ら
か
わ
西** 今年度の活動を振り返って
白河市立白河第三小学校 室井 博人

1 はじめに

本支会は、白河市、矢吹町、棚倉町、塙町、矢祭町、西郷村、泉崎村、中島村、鮫川村の1市4町4村の公立小学校34名の会員で組織されています。今年度は新任4名を含む9名の新会員を迎え活動がスタートしました。

5つの班ごとに研究を実践するとともに、年間3回の研修会を実施する中で「県南は一つ」の合い言葉のもと、諸活動を推進しています。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

本支会では5つの班それぞれが県の研究テーマに沿って研究を進めています。今年度は県大会の年であるため、5月の第1回研修会においては東北大会で発表を行う西郷班の実践発表「地域と共にある学校づくりのための連携・接続と校長の在り方」～家庭・地域等と連携・協働を深める学校づくりの推進～を全員で視聴し内容について検討会を実施しました。これを受け、7月7日の東北連小山形大会にて、西郷村立熊倉小学校山川晃司校長が研究発表を行いました。また、第2回の研修会では5つの班ごとに今年度の実践内容についての話し合いやまとめを行うとともに、来年度に向けた研修の方向性についても話し合いを行い、令和6・7年度の研究の見通しを持つことができました。

(2) 教育講演会

第1回目の研修会では、県南教育事務所長笠原聡美様を講師に、第2回の研修会では県教育庁社会教育課長鈴木正和様を講師にお迎えし、福島県の教育の現状や課題について御講話をいただきました。現場を見据えたよりよい実践につながるお話をいただき、その内容を各学校で生かすことができるよう努力しております。

3 むすびに

講師不足や新採用教員の割合の増加、管理職を目指す人材の育成、働き方改革等、学校の課題は年々増えています。しかしマイナス面ばかりにとらわれることなく、今後も、子どもたちの健やかな成長に向け、より一層校長会の横のつながりを強化し、さらには関係機関・地域・保護者との連携を図りながら、しっかりと取組を行っていきたいと考えます。

耶 今年度の活動を振り返って

喜多方市立塩川小学校 樋口 喜敬

1 はじめに

耶麻支会は、1市1町1村（喜多方市、西会津町、北塩原村）20名の会員で構成されています。今年度は、他地区等から6名の新任会員を迎え、相談しやすい和やかな雰囲気のもと、活動を推進してまいりました。

2 今年度の取組**(1) 地区研修会**

総会の他に、4回の研修会を実施しました。その中で講演会を2回開催し、「発達障がいの子ども理解」（講師：ふくしまをリハビリで元気にする会理事長 岡本 宏二 様）と、「社会教育の現状」（講師：県教育庁社会教育課長 鈴木 正和 様）に関する研修を深める機会を設けました。

(2) 課題研究の推進

3つの課題について班を編制し、班ごとにアンケートの実施や研究と実践を重ねました。研究の結果は3回目の研修会で発表し合い、全会員で共有化を図りました。

8月1日、2日に行われた県小学校長会研究協議会会津大会の運営・発表に携わり、駐車場の運営、分科会第二会場全体の運営、分科会各会場の運営責任と支会発表を担いました。

(3) 各専門部会活動等

行財政部、研究部、生徒指導部、広報部を設け、各部ごと活動の連携を図りながら教育活動の充実に努めました。

(4) 人材の育成

中学校長会、小・中学校教頭会と連携し、学校経営研究会を開催し、5回の講座とその他に面接練習会を実施しました。また、退職校長会との懇談会を通して、現代社会の変化に対応する学校経営についてご教示をいただくことができました。

3 むすびに

新任校長を多く迎えた中、県小学校長会とは何ぞや。また、その動きや活動の内容を十分に理解していくことが大切です。そして、これまでの県小学校長会の実績を理解し、自校に合わせた新たな教育活動の創造と充実した学校運営を目指していきたいと思えます。

両 今年度の活動を振り返って

金山町立金山小学校 矢部 吉彦

1 はじめに

両沼支会は河沼郡（会津坂下町、湯川村、柳津町）と大沼郡（会津美里町、三島町、金山町、昭和村）の5町2村14校の会員で組織している。県内支会で2番目の広さの地区で、1町村に1校やへき地指定の学校も多い。また、新任校長が多いのも特徴である。そのため、町村や経験年数を越えたつながりを持って研鑽し、校長としての力量を高められるように努めている。

2 今年度の取組**(1) 研究の推進**

本支会は、第5分科会「健やかな体」、第8分科会「危機対応」について、2班に分かれ、研究を進めた。そのうち県研究協議会会津大会の第5分科会において、【視点1】「心身の健やかな成長を目指す教育課程の編成・実施・評価・改善（健康教育）」について、発表を担当した。発表者を含む7名を中心に研究の成果と課題をまとめ、発表の準備を進めてきた。支会内の研修会でも、全会員で内容の精査を行って本番に臨み、当日は発表を通して県内の参加者と意見交換を行い、校長としての役割や責務について、理解を深めることができた。

(2) 感染症への対応と教育活動の見直し

5月に新型コロナウイルスの感染症法上の扱いが5類に変更になったことにともない、コロナ禍で中止や規模縮小をされてきた多くの活動が従来どおりに実施可となった。しかし、コロナ禍の影響を受けた学校教育の中でも、特に行事については、教育的な価値や、省略・簡略化できるどころ、また、進化・発展させるべきところ等が明らかになってきた。それまでの歴史や実践を受け止めつつも変革をキーワードに、働き方改革とも連動させ、校長会内で意見交換や情報共有をし、よりよい教育活動の方向性について議論しているところである。

3 むすびに

今後も会員相互の情報交換や連携を大切にしながら、各学校や各地域の実態に応じたよりよい教育活動の推進に努めていきたい。

南
会
津

今年度の活動を振り返って

只見町立朝日小学校 齋籐 勝芳

1 はじめに

南会津支会は、4町村（南会津町、下郷町、檜枝岐村、只見町）13名（檜枝岐村は小中兼務で中学校籍）の会員で構成されており小規模校が多い状況である。中学校会員と合わせても20名と少人数のため、中学校と共通のテーマを設けて話し合い、情報交換も密に行ってきた。また、今年度は、8月に県小学校長会研究協議会会津大会で支会発表を行ったことからそれらの取組を中心に述べたい。

2 今年度の取組

(1) 第52回県小学校長会研究協議会会津大会

本支会では第6分科会研究主題「学校の教育力を高める研究・研修と校長の在り方」において「学び続ける教職員を目指し、資質能力の向上を図る研究・研修体制の充実」と題して、明和小学校 湯田 和敬校長が研究発表を行った。その中で「対話」「ミドルリーダー育成」「研修の提供」等がキーワードに挙げられていた。キャリアステージに応じて求められる資質能力を育成するために「校長及び教員としての資質の向上に関する指標【第2版】」の活用の仕方や個に応じた研修機会や情報の提供の在り方などについて今後も支会で研修を継続していきたい。

(2) 小学校長会視察

本支会では、震災を忘れず語りつぐ必要性や現在の状況を学ぶために8月4日に東日本大震災・原子力災害伝承館、震災遺構：浪江町立請戸小学校を見学するとともに、なみえ創生小中学校で管理職の先生方からこれまでの様子について教えていただいた。参加した校長先生方からは「毎年、子どもに見せて今の福島、日本を考える生きた教材にしなくてはならない。」などの感想を聞くことができた。意義有る研修会であった。

3 むすびに

新型コロナウイルス感染症が5類移行となり、これまでに加えて新たな課題も増えてきている。そのような状況だからこそ、真に児童のためになる未来の学校づくりを模索する場としての校長会が求められている。本支会も、地域の実態に即して関係機関と深く連携しながら、教育実践の充実に努めていきたい。

相
馬

今年度の活動を振り返って

南相馬市立原町第一小学校 鈴木和一郎

1 はじめに

相馬支会は2市1町1村の小学校24校、義務教育学校1校、計25校の会員で構成されています。今年度は新しく9名が入会し、メンバーが大きく変わりましたが、各地区会長を中心に協力・相談体制を整え、活動を進めてきました。

2 今年度の取組

(1) 研究の推進

本支会では、第3分科会「知性・創造性」、第5分科会「健やかな体」、第9分科会「自立と社会性」の3グループに分かれ、研究を進めてきました。各研究課題について、各校での実践例を持ち寄るなど協議を重ねながら「学校経営」や「校長の在り方」はどうあるべきかを考えてきました。また、今年度行われた福島県小学校長会研究協議会会津大会においては、第9分科会「視点2」の「未来への夢や志を育むキャリア教育の推進」の発表を担当しました。担当グループ8校での取組をまとめ、経営ビジョン、教育課程、教職員、関係機関との連携の視点で発表をしました。さらに、東北連合小学校長会研究協議会山形大会では12名が、全国連合小学校長会研究協議会東京大会では2名が参加しましたので、研修したことを支会に持ち帰り、共有化を図りました。

(2) 次年度以降の研究

第Ⅲ期研究に向け、これまでの研究組織を見直し、新体制での取組についての提案があり、意見交換を重ねてきました。その結果、次年度からは研究課題を1つにしぼって進めていくことにしました。これまでの3つの研究グループは維持しつつ「研究推進部」「研究調査部」「資料作成部」に分け、それぞれのリーダーからなる研究統括グループを新たに設け、研究を推進していく方向で考えています。令和8年度東北連小での発表も予定されていることから、相馬支会の研修日程についても研究推進が回りやすい日程に変更することにしています。

3 むすびに

今年度末に南相馬市立八沢小学校が閉校し、次年度は24校での活動となります。よりよい新体制を整え、これまで以上に連携を深めながら、教育実践の充実に努めていきたいと考えています。

双葉 今年度の活動を振り返って

橋葉町立橋葉小学校 烏中 雪野

1 はじめに

本支会は、震災前は17名の会員でしたが、現在は統廃合が進み、9校8名の会員で組織されています。今年度から大熊町が帰町し、「学び舎ゆめの森」の教育活動がスタートし、学校の所在地が浜通りによりやく集まりました。「双葉は一つ」を合言葉に活動をすすめています。

2 今年度の取組**(1) 研修会等**

- ① 総会【4/7（金）橋葉中学校】
 - ア 活動計画の確認
 - イ 役員選出及び組織編成
- ② 第1回研修会【5/25（木）広野小学校】
 - ア 行財政部、生徒指導部、広報部の報告
 - イ 研究部より県小学校長会発表準備
- ③ 第2回研修会【7/14（金）富岡小学校】
 - ア 行財政部、生徒指導部、広報部の報告
 - イ 研究部研究協議

研究課題「自ら判断し行動できる子どもを育てる安全教育・防災教育の推進」について協議
 - ウ 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会報告
- ④ 第3回研修会【12/8（金）学び舎ゆめの森】
 - ア 行財政部、生徒指導部、広報部の報告
 - イ 講演「双葉郡の復興と創生に向けた校長のあり方」相双教育事務所長 武口隆行様
 - ウ 学び舎ゆめの森 校舎見学
 - エ 双葉郡教育復興ビジョン推進協議会計画

(2) 交流

- ① 県小学校長会事務局との懇談会
- ② 東京電力福島第一原子力発電所・被災地等視察及び懇談会

震災から12年たちましたが、県内および全国の校長先生の方々に被災地の現状について、理解してもらう良い機会となりました。

3 むすびに

少ない人数ながら、双葉の校長会としてできること、双葉ならではの活動に取り組んできました。今後も未来ある双葉の子どもたちのために「チーム双葉」として、学校が復興の最大の拠点となるよう活動していきたいと思っております。

いわき 今年度の活動を振り返って

いわき市立平第三小学校 菅野 輝義

1 はじめに

本支会は、63校（休校3校）、58名の会員でのスタートとなりました。市小学校長会の活動目標を「ともに学び、悩み、考え、行動する校長会」と定め、いわきの未来を担う子どもたちの健やかな育ちに向けて、会員の英知を集め、活動に取り組んできました。

2 今年度の取組**<主な年間行事>**

- 4月 いわき市小学校長会総会、臨時小学校長会役員会、第1回小学校長会役員会
- 7月 東北連小山形大会（28名参加）
- 8月 県小学校長会研究協議会会津大会（57名参加）、第2回小学校長会役員会
- 10月 全連小東京大会（4名参加）、第3回小学校長会役員会
- 11月 臨時小学校長会役員会
- 12月 校長研修会（講師：工藤 勇一氏）
- 1月 いわき十日会
- 2月 第4回小学校長会役員会
- 随時 各専門部会

この他に、校長会主催の行事として、陸上競技大会、理科作品展、造形・書写展等の運営をとおり、子どもたちの豊かな心の育成や体力・運動能力、学力の向上などに向けて取り組んできました。

<その他の取り組み>**(1) 組織と連携を生かして**

アフターコロナにおける校長会主催行事の工夫改善をとおりして、多忙化解消等各種課題の解決に向け、中学校長会や行政等とも積極的に連携し、新たに支部編成となった各支部内での意見交換や実践を積み重ね、組織的に取り組んでいます。

(2) 人材育成のために

様々な教育界における課題に対して、管理職の経営力・資質向上のための研修会を実施し、校長の資質の向上に努めてきました。また、教頭やミドルリーダー等の人材発掘、育成のための指導会などを実施しました。

3 むすびに

今後も、各校長の創意ある学校経営のもとに、支部長を中心に組織的に機能する校長会を目指し、さらに努力していきたいと考えています。

福島のみずなを大切に 未来へ

NPO法人「ふくかねっと」理事長 鄭 鉉淑(チョン・ヒョンスク)さん

今回紹介する「ふくしまの人」は、福島市庭坂地区でNPO法人「ふくかねっと」を運営されている理事長の鄭 鉉淑(チョン・ヒョンスク)さんです。「福島のみずなを大切に 未来へ」を合言葉に、障がい者支援・教育施設「ユニバーサルカレッジ・サラン」や「いやしカフェ」(建替え中)、「吾妻アグリトモ」ブランド化事業等の運営、さらには近隣の小中学校の児童生徒やPTA、地域コミュニティを対象にした本場韓国のキムチ作り教室など、日韓交流、地域に根ざした活動を精力的に行っていらっしやいます。



—合言葉「福島のみずなを大切に 未来へ」に込めた思いをお聞かせください。—

日本の東北だからこそ味わえる福島の四季折々の風景、そこに暮らす福島の人々のやさしさが大好きで、20年ほど前、福島へ移住してきました。しかし、韓国に福島が知られていないと感じ、韓国の青少年と福島の青少年の交流を通して絆を結ばせようという思いを込めたものが、この合言葉です。福島に移住してから20年間、「草の根の交流」と呼んで、こうした国際交流活動の本気になって行ってきました。その活動が評価され、外務省から「日韓文化交流基金賞」をいただくことにもつながりました。

—信条としていることや活動の原動力をお聞かせください。—

福島で生きる“生きがい”を感じられる生き方をするということです。今はボーダーレスの時代です。〇〇人、福島人といった狭いアイデンティティではなく、福島で共に生きる一人の人間として、私ができることは何なのか、どう生きるかを常に問いながら生きています。その具体の一つが「ユニバーサルカレッジ・サラン」のような障がい者福祉であり、自分より弱い人つまり「マイノリティ」のような、誰かのために何ができるかを考える人生でありたいと思っています。それに気づかされたのは東日本大震災でした。あの年の11月までひたすら炊き出し支援を行っていた時に「今、自分がやるべきことはこれだ」と見つけたのが「福祉」「人々の癒し」でした。それで「いやしカフェ」を作ったのです。また、「どうやって癒すか」を考えた時、その方法が「人々の交流」と「食」だったということが、これまでの活動につながっています。

—福島の子どもたちへ伝えたいことをお願いします。—

小学生を韓国へ連れていくことがあり、そこで感じることは、国を超えて、より広い視野をもってほしいということです。福島はとても素晴らしいところであるがために、ここ福島ですべてが間に合って完結させることができずしてしまいます。しかし、それに満足し、そこでとどまってほしくありません。繰り返しますが、ボーダーレスの時代です。もっとオープンマインド(開放的・偏見がない)な意識を持って様々な体験をすることが必要ではないかと私は考えています。

プロフィール

韓国仁川生まれ 1984年来日 早稲田大・同大学院、東京外語大大学院修士課程修了
2000年 福島市に移住 翌2001年 NPO法人「ふくかねっと」結成
「民話で知る韓国」「暮らしのなかの日韓交差点」「田舎ぐらしの韓国人」など著書多数

(聞き手：福島市立庭坂小学校長 長澤 昭仁)

秋の叙勲 ~おめでとうございます~

令和5年度の「秋の叙勲」が発表され、本会元会員の叙勲者は次のとおりです。なお、規定により祝電をお送りいたしました。

☆瑞宝双光章（6名）

- 福井 一明 様 元福島市立福島第一小学校長 (70歳)
土屋 悦男 様 元福島市立福島第三小学校長 (70歳)
本名 幸平 様 元耶麻郡猪苗代町立千里小学校長 (70歳)
石井 賢一 様 元双葉郡浪江町立浪江小学校長 (70歳)
鈴木 貞安 様 元いわき市立平第三小学校長 (70歳)
片寄 信 様 元いわき市立小名浜第一小学校長 (70歳)

祝 表 彰

—表彰おめでとうございます—

◆文部科学大臣教育者表彰（1名）

鈴木 基之（城北）

◆福島県教育委員会表彰

○学校教育功労者（4名）

近藤 静雄（金透） 橋本 一弥（開成）
増子 春夫（芳賀） 鈴木 基之（城北）

◆永年勤続表彰（16名）

- 嶋原 理（福島一） 小野 忠大（柱 沢）
渡辺 博明（岩 根） 芳賀沼真由美（糠 沢）
難波 和生（芳 山） 館脇 一弘（赤 木）
石井 里香（蓬 田） 鈴木 純子（五 箇）
近野 典男（磐梯二） 土屋 裕史（千 里）
後藤 洋一（姥 堂） 長澤 敏行（三 島）
湯田 和敬（明 和） 荒 博史（新 地）
北原 貴泰（豊 間） 佐藤 雅彦（錦 東）

— 令和6年度行事予定表(案) —

Table with columns: 月, 本 会 (大会・理事会等), 各 部 会 (総務・経理, 行 財 政, 研 究, 生 徒 指 導, 広 報). Rows list various events from April to March with dates and locations.

編集後記 会報258号をお届けいたします。ご多用の中、玉稿をお寄せいただきました関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

- 発行 福島県小学校長会 〒960-8107 福島市浜田町4番16号 富士ビル2F 電話024(534)5411
会長 佐藤浩昭（福島市立清明小学校）
編集 山本 巖・長澤昭仁・島田祥司・佐藤友子・小野忠大
印刷 有限会社吾妻印刷

(一財)福島県教育会館 事業ご案内

福島県教育会館の下記事業につきまして、ご理解ご支援をよろしくお願い申し上げます。

- 夏休みの友 ●福島県立高校入試問題集 ◆貸し会議室
●福島県書ぎぞめ展 ●教育関係者名簿 (教育関係者は半額)

福島市上浜町 10-38 office@kyouikuikaikan.jp
TEL 024-523-0206 FAX 024-523-0208